

研究開発成果 実装支援プログラム
平成21年度 報告書

実装活動の名称

「家庭内児童虐待防止にむけたヒューマンサービスの社会実装」

採択年度	平成21年
実装機関名	立命館大学
実装責任者	中村 正

1. 概要

申請者がドメスティック・バイオレンスや性犯罪者処遇において実践してきた成果を子ども虐待に応用し、これまでに取り組んできた実践を継続し、具体的な家族再統合実践に取り組んだ。

まず、虐待親向けのプログラムの実施では、グループワークと個人カウンセリングもしくは夫婦カウンセリング、そして参加している家族を対象にしたケース会議を展開した。

第2は、特定の家族をめぐる多職種連携会議を実施した。児童養護施設の心理士（きょうだいなので2名）と施設でのケア担当者、児童相談所の精神科医と心理士、統括する主任児童福祉司、プレイセラピー担当の心理士等、総数12名のケースカンファレンスをおこないケース分析を実施した。家族の再生にむけた実りの多いものであった。

第3は、申請書に記載した目標であるヒューマンサービス社会技術の応用に関して、近隣自治体への拡大を掲げたが、それに向けた打ち合わせを開始した。

第4は、人材育成に関して、虐待親向けプログラムのコアの一種であるソーシャルスキルトレーニングに関して、児童相談に関係する援助職者向けの基礎訓練をワークショップ方式で実施した。

こうした取り組みは、当初の目標を比較的早期に実現できる展望を拓いたのではないかと考えている。もちろん、核心にあるのは家族支援であり、ニーズのある家族の再統合を着実にすすめることである。現在は、グループワークに5家族が参加しており、被虐待児童のケアを中心にしつつも、再統合実践をすすめていきたいと考えている。

2. 実装活動の具体的内容

まず、虐待親向けのプログラムを実施したことである。月2回のグループワークと月2回の個人カウンセリングもしくは夫婦カウンセリング、そして参加している家族を対象にしたケース会議を展開した。グループワークは月に2回で2009年10月から2010年3月までに計12回、カウンセリングは、15回セッション実施した。

第2は、特定の家族をめぐる多職種連携会議を実施したことである。児童養護施設の心理士（きょうだいなので2名）と施設でのケア担当者、児童相談所の精神科医と心理士、統括する主任児童福祉司、プレイセラピー担当の心理士等、総数12名のケースカンファレンスをおこないケース分析を実施した。家族の再生にむけた実りの多いものであった。

第3は、申請書に記載した目標であるヒューマンサービス社会技術の応用に関して、近隣自治体への拡大を掲げたが、それに向けた打ち合わせを開始したことである。大阪府児童相談所、大阪府堺市児童相談所（政令市）の2自治体である。個人情報保護の規定、委託契約等、実現準備を開始した。

第4は、人材育成に関して、虐待親向けプログラムのコアの一種であるソーシャルスキルトレーニングに関して、児童相談に関係する援助職者向けの基礎訓練をワークショップ方式で実施したことである。2010年3月13日-14日にかけて立命館大学大阪オフィスで開催し、20名が参加した。

3. 成果

申請段階で計画していた課題の一つに汎用性を高めることを掲げていた。具体的には、大阪市との連携で実施している取り組みを近隣自治体に広げると課題である。この課題については、当初予定よりも早く実現できた。本年度中に大阪府内の6つの児童相談所と契約にむけて話し合いが進んでいる。まず、第1に、2010年3月2日に府内の児童相談所長会で研修会を開催し、本プロジェクトの概要と意義を理解していただいた。第2に、その結果、4月16日に府内児童相談所の心理士や福祉司を対象にした研修会を実施することが決まった。これらをもとにしてプログラム実施を府内全域を対象にすることとなり、現在その契約や守秘義務や虐待親処遇のフローチャート作成などに取り組み、成果をあげている。また、2. 実装活動の具体的内容において記したように、課題の一つであった人材育成につき、ソーシャルスキルズトレーニング（SST）の本格的な講習会を開催することもできた。

著書として、これらの成果をまとめた。望月明・サトウタツヤ・中村正・武藤崇編『対人援助学の可能性』（福村出版、2010年3月）。

本プロジェクトに関わる内容につき、学会への招待講演として「男らしさの病と社会臨床の課題」、第49回日本心身医学会大会（近畿地方会）、京都市、京都テルサ、2010年2月がある。